

文学部アジア文化学科の取り組み

武 田 秀 夫 (文学部アジア文化学科)

【 】これまでの実績

本学科の教育目標は、1997年4月30日の「アジア文化学科設置認可申請書」(東洋文化学科からの改組転換による)にも述べたように、「アジアの現状についての認識と、その現状をより深く理解するための歴史と文化についての知識、ならびにアジアの人びととのコミュニケーションをはかる能力を有する人材を育成する」ことにある。

この目標を達成する有効なカリキュラムとして、われわれがその成立に努力を傾注した科目が「アジア現地演習〔アジアの現地に1週間滞在して、学生が各自の計画で現地調査をする演習〕」と「アジア社会演習〔現地演習をはさみ通年で事前指導・事後指導を座学で行なう〕」のセットで履修する演習科目であった。この科目は、事前の文部省との折衝を通じて、かなりの難産の末にようやく承認されたものであった。

われわれには、東洋文化学科時代にも「学科行事」として実施してきた「バスで出かける現地巡検」、博物館見学、演劇鑑賞などの諸活動を盛んに行ってきた実績があった。これら「現地で体験する諸活動」を軸に、座学を組み合わせれば、「生きた知識を授与できる」と考えており、これからの教育の重要な柱となるのはこのような「体験型教育=学習活動」であるという見通しを持っていた。

1998年4月からアジア文化学科はスタートし、カリキュラムとしては1999年から「現地演習」・「社会演習」がスタートすることとなった。そこで問題となったのは、東洋文化学科時代の「バスでの現地巡検」、博物館見学、「演劇鑑賞」などの諸行事をどうするかであった。「現地演習」・「社会演習」は、現地に1週間滞在するのでかなり高額のコストが必要となる。費用面で参加できない学生にも「体験型教育=学習活動」を学科として保障する必要があるという観点から、上記の諸行事は継続して学科行事として実施することとなった。

A 学科行事としての体験型教育=学習活動

1) 1998年度

- ・ 9月16日・17日・18日 2泊3日・現地巡検 沖縄県那覇市他で実施。
- ・ 12月3日 「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座。

2) 1999年度

文学部アジア文化学科の取り組み

- ・ 11月13日・14日 1泊2日・現地巡検 長崎・長崎島他で実施。
- ・ 12月4日 「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座。
- 3) 2000年度
 - ・ 5月27日・28日・29日 2泊3日・現地巡検 青森県弘前市他で実施。
 - ・ 12月21日 「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座。
- 4) 2001年度
 - ・ 4月14日・15日 1泊2日・導入教育兼現地巡検 岡山県蒜山で実施。
 - ・ 12月21日 日帰りバス・ツアー〔国立民族学博物館, 明石海峡, 孫中山記念館, 神戸市南京街〕
 - ・ 12月21日 「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座。
- 5) 2002年度
 - ・ 4月27日・28日 1泊2日・導入教育兼現地巡検 兵庫県三木市で実施
 - ・ 11月9日 日帰りバス・ツアー〔平等院にてインド交換留学生を交えて文化交流会〕
 - ・ 12月21日 「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座。
 - ・ 2月19日 日帰りバス・ツアー〔野外民族博物館リトルワールド(犬山市)〕

B カリキュラムとしての体験型教育 = 学習活動 「現地演習」・「社会演習」

1999年度を第1回とし、毎年夏期休暇中に7泊8日の「アジア現地演習」を、中国(北京)、東南アジア(シンガポール・マレーシア)、日本(沖縄)で実施している。

それぞれのコースは、学生にレポートを公表させ、それを教員の研究とともに、『アジア観光学年報』として公刊している(創刊号2000年4月, 第2号2001年4月, 第3号2002年4月, 第4号2003年4月, 第5号2004年4月)。

【 】2003年度の実績報告

A 学科行事としての体験型教育 = 学習

1) 4月5日・6日 1泊2日 導入教育兼現地巡検 滋賀県近江八幡市

本学科の「導入教育兼現地巡検」は、【 】にも記したように、2001年度からはじめた新企画である。新入生全員を参加させて、学科教育への導入を行なうと同時に、宿泊地の周辺を対象にして現地での見学を実施する。新入生時点から「体験型教育 = 学習への導入」を行なうことも、実施の目的の一つにしている。

2) 5月29日 日帰りバス・ツアー〔野外民族博物館リトルワールド(犬山市)を中心に〕

[] 各学部・学科の「特色ある教育」報告

世界の多様な民族の文化を紹介する博物館で、本館の展示室には各地の民族資料が豊富に展示されており、野外には2.5キロにわたり33の家屋を移築した展示がある。特定の授業との連携は行っていないが、アジア諸地域に関してコンパクトに体験できる施設であり、いわば本学科の基礎的な知識を体験的に獲得させる機会として重要である。

3) 10月25日・26日 1泊2日 山口・萩・津和野巡検。

本学科の「体験型教育=学習」活動のうち、学科行事としては主要なものである。金額的にも相当の経費を要するので、できる限り学科教育との連携を迫る必要がある。今年度は初級演習1F・2Fとの連携をはかった。セメスター制との関連もあって、1F受講生と2F受講生が連続せず、結果的には十分な連携は取れなかった。それでも1Fでは、山口県の現状の把握をメインとする授業を、2Fでは萩藩士であった吉田松陰に関連する情報の収集をメインとする授業を行ない、少々の連携はできた。

1泊2日のバスツアーの場合、宿泊費はどうしても学生負担になるので、参加を強制することは不可能であることが、連携のネックとなる。できるかぎり学生負担を軽減できなければ、本格的な展開は困難である。04年度は3年生を対象とする中級演習との連携を試みたい。

4) 12月20日 「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座。

近年は青少年層全体にみられる傾向であるが、「日本文化体験」の機会が極端に減少してきている。関西の重大な年中行事である「顔見世」の案内を毎年行なうことで、定期的に日本文化への「体験型教育=学習」の機会を提供する目的を持つ。

B カリキュラムとしての体験型教育=学習活動 「現地演習」・「社会演習」

夏期休暇中に7泊8日の「アジア現地演習」を、中国(北京)、東南アジア(シンガポール・マレーシア)、日本(沖縄)の3方面で実施している。しかし、03年はSARSの流行により、大学執行部から中止の指示があり、中国と東南アジアについては中止、沖縄についてはのみ実施した。沖縄演習のレポートは3種類で、現地での体験を日程ごとに毎日詳細に記録した「行動記録レポート」、現地での調査の状況と活字やインターネットなどの情報を加えて8000字でまとめる「現地調査レポート」、『アジア観光学年報』の原稿を作成する「観光学レポート」である。本年は沖縄演習のみのレポートなので分量が少ない。本学に関する「体験型教育=学習」の他の成果も加えての刊行としたい。

【 】本年度の総括

SARSという予期しなかった要因により、カリキュラムとしての体験型教育=学習の「現地演

文学部アジア文化学科の取り組み

習」・「社会演習」の中国（北京）コース，東南アジア（シンガポール）コースを中止にせざるを得なかったことは，学科の教育にとっては大きな痛手であった。これは今年度だけの痛手ではなく，参加学生が演習終了後には教科学習への取り組みの熱意が上昇するが，それを来年度は期待できない点からも痛手なのである。

「現地演習」には参加費用として十数万円が必要であり，誰でもが参加できるわけではない。すでに記したようにこれを補完するものとして，バス・ツアーや観劇などの学科行事があるが，これとても無料で実施できるわけではない。宿泊を伴うバス・ツアーは宿泊費1万円が，顔見世は観劇料3000円が必要である。これらの行事は予算面で総枠での規制がかけられている。この総枠規制と学生負担が実施面での障害となっている。たとえば宿泊を伴うバス・ツアーの場合，もう1泊して下関市・防府市を巡検できれば，総合的な地域の理解という面では申し分ないが不可能であったなどである。

本年度は観劇について新たな計画を立てた。それは北京から来る京劇劇団の公演の鑑賞であった。残念ながらこれもSARSの影響で公演が中止となり，実施できなかった。もしこれを実施していれば，顔見世の学生数を制限することになったであろう。これも費用面での制限が実施面での障害となっている例である。

さらに教育的観点から見れば，体験型の学科行事は，平常の教科教育との結合が望まれることになるが，逆にその結合を強くしすぎると特定授業の一環となり，幅広い学生に体験型教育＝学習の機会を与えるという主目的から逸脱する。

本学にはまだまだ「悪しき平等主義」が根強く，「体験型教育＝学習」に学部・学科の熱意があるうがなかるうが，平等に予算をつけようとする姿勢がうかがえる。学部・学科によって教育方法は異なって当然であり，それに伴い予算措置も考慮されるべきであろう。